

# 落花生の登熟期における茎葉切除が収量に及ぼす影響

三苦功吉・野口敏治・宝満利行 (大分県農業技術センター)

Kokichi MITOMA, Toshiharu NOGUCHI and Toshiyuki HOMAN : Effects of Stem Clipping in the Ripening Period on the Yield of Peanut

大分県の主要畑作地帯である大野郡内では落花生の契約栽培による栽培面積の増加が期待されている。この場合、収量が高く収穫期の早いポリマルチ栽培が行われているが、黒ボク土壌でもあることから、収穫期まで茎葉の繁茂が著しい。これらの多量の茎葉は掘取り作業、その後の莢実の乾燥及び脱莢作業の支障となっている。そのため産地では収穫前に茎葉の切除がなされているが、この作業は生産者の都合のよい時期に行われるため、収量等への影響が考えられる。そこで、落花生の登熟期における茎葉の切除と収量との関係について検討した。

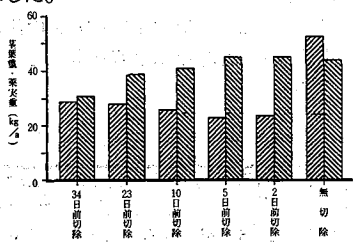
## 1. 試験方法

1989～'90年に大分県農業技術センター畑作部の多腐植質黒ボク土圃場で、落花生品種ナカテユタカを用い、4月6半旬に播種した。栽植様式は畦幅120cm、床幅75cmで条間45cm 2条、株間15cmとし、1株1本立でポリマルチ栽培を行った。施肥量はN : 0.3, P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> : 1.0, K<sub>2</sub>O : 1.0kg/aとし、苦土石灰20kg/aを加え全量基肥施用した。

茎葉切除は、無切除区の収穫適期を9月10日とし、適期34, 23, 10, 5, 2日前に地際から約25cmの位置で剪定鋏を用いて行った。

## 2. 結果及び考察

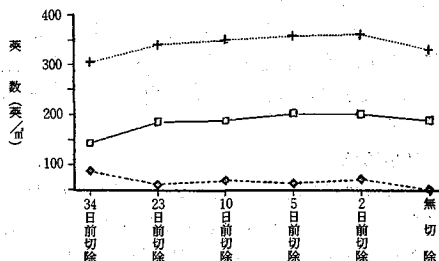
結果は収穫適期がほぼ予定通りとなった1989年のデータで示した。



第1図 茎葉切除時期が茎葉重、莢実重に及ぼす影響  
注) 斜線 茎葉重, 黒 莢実重

茎葉重、莢実重：第1図に示すように、収穫前に茎葉を切除することで無切除区の約1/2の茎葉重となった。切除時期が早いと茎葉重が増加しているが、これは分枝が再生したことによる。莢実重との関係では、切除時期が早いほど莢実重が減少し、5日前切除から無切除並みとなった。上莢重は莢実重と同様の傾向を示し、屑莢重は各区とも同程度であった。

莢実数：第2図に示すように、上莢数は茎葉の切除時期が早いほど少なく、収穫5日前からの切除は無処理と同程度であった。34日前切除では屑莢数が多く、総莢数は



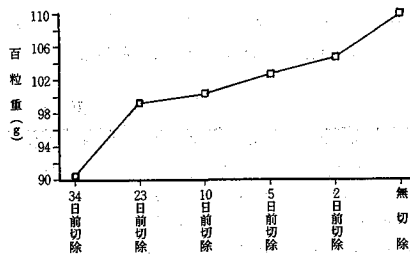
第2図 茎葉切除が莢数に及ぼす影響  
注) + 総莢数, □ 上莢数, ◇ 屑莢数

第1表 茎葉切除時期が子実重に及ぼす影響 (kg/a)

茎葉切除時期	上 莢			下 莢			屑莢
	上実	下実	屑粒	上実	下実	屑粒	屑粒
34日前切除	20.6	1.8	0.2	1.3	0.2	0.2	0.1
23日前 "	23.7	3.8	1.5	0.8	1.5	0.7	0.3
10日前 "	21.5	8.6	0.7	0.7	1.7	1.0	0.4
5日前 "	29.3	4.3	0.1	1.0	1.9	0.4	0.2
2日前 "	29.5	4.2	0.4	1.3	1.6	0.6	0.2
無切除	29.3	3.3	0.3	1.9	1.1	0.3	0.2

は少なく、茎葉切除の影響が大きかった。総莢数は5～2日前切除でピークとなった。

子実重：結果を第1表に示した。莢実重と同様の傾向で、上莢重は5日前切除以後は無切除と同程度であった。百粒重：上実100粒の重量を第3図に示したが、茎葉を



第3図 茎葉切除時期が百粒重に及ぼす影響

早い時期に切除するほど小粒化し、特に34日前切除では無切除より18%小さくなった。

以上のことから、落花生の茎葉を収穫適期より早く切除するほど、上実重、百粒重の低下が著しく、減収することが明らかとなったが、収穫適期5日前からの茎葉切除であれば比較的影響が少ないと思われた。しかし、落花生の収穫適期は年次差が大きく、適期の判定法も確立していないことから、生産場面では掘取りの1～2日前に切除作業を行うことが望ましいと思われる。